

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 6 日現在

機関番号：24405

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19H01312

研究課題名(和文) 中世後期から近世初頭における武家拠点形成の研究

研究課題名(英文) A Study of the Formation of Samurai Stations in the Late Middle Ages and Early Modern Times

研究代表者

仁木 宏 (NIKI, Hiroshi)

大阪公立大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：90222182

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,200,000円

研究成果の概要(和文)：武家の拠点形成のプロセスは、武家が支配領域の経済流通を掌握し、城下町を中心地として権力を確立してゆく過程でもあった。15世紀における経済・流通の発展が地域社会の核としての都市(港町、宗教都市など)を発達させると、武家は都市を掌中にするを通じ、それまでできなかったレベルで地域支配を進められるようになる。豊臣政権は、征服地に城下町を造ったり、服属した大名に先進的な城下町を建設させたりすることで、より求心的な中心地を創設し、権力統合を押しすすめた。城下町は「天下統一」のための重要な要素であった。さらに近世においては、各幕藩領主の城下町が卓越した中心性を獲得し、領国を統合する拠点になってゆく。

研究成果の学術的意義や社会的意義

城下町の成立・発展を、武家による拠点形成の視点のみから説明するのではなく、城下町の立地や機能が、先行する中世都市である港町、宗教都市に規定され、やがてそれらをどのように包摂して城下町が展開してゆくかを丁寧に検証した。これは、文献史、考古学、歴史地理学などの学際的な手法によってはじめて可能となったのであり、地域社会の中心に武家拠点が位置づいてゆくことの本質的意義がはじめて明らかになった。14世紀以来、武家拠点が明確化し、都市として発達することで地域社会における中核としての地位を確立する過程は、武家が国家権力として確立し、社会統合の主体となる経過と重なる。現代につづく拠点形成を解明した。

研究成果の概要(英文)：The process of the formation of samurai strongholds was also the process by which the samurai took control of the economic distribution of their territory and established their power with the castle town as their center. As economic and distribution developments in the 15th century led to the development of cities as the core of local communities (Port towns, religious cities, etc.), samurai families were able to gain control of the region at a level they had not been able to before by gaining control of the city. The Toyotomi government created more centripetal centers and pushed for consolidation of power by building castle towns in conquered areas and by having subjugated feudal lords build advanced castle towns. The castle town was an important element for the "unification of the whole country." Furthermore, in the early modern period, the castle towns of the feudal lords of each feudal domain acquired a prominent centrality and became bases for integrating their territories.

研究分野：日本史

キーワード：武家拠点 城郭城郭 城下町 戦国時代 織豊期 都市

## 1. 研究開始当初の背景

守護所(15世紀~16世紀第2四半期)は、守護が地域支配拠点として整備した都市で、守護館と、一族や家臣たちの館を中心とする。守護の氏寺や神社、小規模な町などをともなった。美濃革手、甲斐甲府、若狭小浜、周防山口などで実態解明が進んでいる。戦国期城下町(16世紀第2~第3四半期)は、戦国大名などの地域権力が整備した都市で、山城(やまじろ)の上や山下に大名館が築かれ、使い分けがなされた。一族・家臣らの館も山上・山下に分散し、多数の寺社も立地した。より発達した町をともなう。越前一乗谷、近江観音寺、安芸郡山、土佐岡豊などが典型例である。織豊期城下町(16世紀第3四半期~17世紀初頭)は、石垣づくりの山城か平山城を中核として、その膝下に武家屋敷が集められた。武家居住区と区別して設定された町には、並行する複数の直線道路がひかれ、両側に町屋が櫛比した。城下町全域を囲繞する惣構(総構)が構築されることも多い。近江安土、摂津大坂を嚆矢として全国に広く展開している。

守護所・城下町については、1980~90年代、文献史学、考古学、建築史学(都市史学)、歴史地理学などによる学際的研究が一気に進み、折からの中世都市ブームとも相まって、数多くの事例が紹介された(金子拓男・前川要編『守護所から戦国城下へ 地方政治都市論の試み』(1993年度日本考古学協会シンポジウムの成果、名著出版、1994年)、内堀信雄・鈴木正貴・仁木宏・三宅唯美編『守護所と戦国城下町』(2001年守護所シンポジウム@岐阜研究会の成果、高志書院、2006年))。2000年代になってからも、各地で考古学的な視点からの研究がなされ、具体的事例は蓄積されつつある。しかし、研究は個別化、分散化し、守護所・城下町の動向を全国的にとりまとめようとする研究は希薄になった。実際、研究者が個人でまとめられるような研究テーマでもなくなった。

守護所ならびに戦国期・織豊期城下町は、武家が全国的・本格的に都市形成を行ったはじめての存在であり、近世城下町の先駆けであった。また15~16世紀は中世から近世への移行期にあたり、都市を中核とする社会構造が大きく変容してゆく時期にもあたる。しかし、守護所・城下町の展開を理論的に整理するとともに、日本社会の全体的な流れのなかに位置づける作業は道半ばである。中世後期から近世初頭における武家の地域拠点形成の歴史的意義は何か。これまで明らかにされてきた知見と課題を共有し、幅広い時代と地域をカバーする研究メンバーによる学際的・総合的研究として本研究に取り組む。

## 2. 研究の目的

考古学や建築史が主体となって城下町の空間構造が詳細に解明されるようになったことと反比例して、流通の発展、地域経済圏の成立などが城下町の形成・展開にどのように作用したのか、論じられることが少なくなった。城下町を単一の都市としてとらえ、地域社会や流通・交通などと相互に影響を与えながら変容した側面を軽視するようになったからである。

一方、文献史学の権力論研究においては、近年、室町・戦国期から織豊政権期における大名や地域権力についての研究が飛躍的に進んでいる。発給文書や権力意志決定システムなどから大名の性格を規定しようとするものである。しかし、1980年代までの大名権力論の主たるテーマの一つであった、都市や商業・流通のあり方を領国レベルで検討することはほとんどなされなくなった。そのため守護所・城下町研究の進展が大名権力研究と無関係になってしまった。だが、城下町における大名館、一族・家臣の屋敷配置はまさに権力中枢のあり方を空間に具現するものであり、これを参考にしないで権力論を展開している文献史学の現状は残念といわねばならない。

そこで本研究では、権力論研究において注目される成果を発表しつつある、南北朝期から豊臣期を専攻する中堅・若手の研究者を多く研究分担者とした。発掘調査や歴史地理学的研究などによって空間構造が解き明かしてきた守護所・城下町の現地に臨み、共同研究することで、権力論と空間論の接合をめざす。他方、共同研究の場合は、それぞれの地域で守護所・城下町の詳細なあり方を解明してきた研究協力者などにとっては、最新の権力論や経済・流通研究に接することで、空間構造の背景にある社会構造を知る貴重な機会となる。

こうして本研究では、全国と地域でそれぞれ活動する研究者が、具体的な場を対象に、都市空間と権力・経済などの結びつきを複合的に考察する。これにより守護所・城下町研究の個別化、分散化の課題を克服し、新しい視角からの理論的提起にいたりたい。

守護所については、国府・国衙からの継続性が注目され、一国支配の拠点としての側面が重視されてきた。だが、15世紀前半までの初期守護所では家臣団集住はほとんどみられず、付随する町場はきわめて狭小であった。守護館は一見、荘園の政所や在地領主の居館とちがわず、寺院の一角を間借りしている事例もある。これは当該期の守護の多くが「在京領主」であったことや、当時の守護支配の性格に規定されている。本研究では、守護館や初期段階の守護所の実態を、発掘調査や歴史地理学的研究の成果によってまとめる。かかる視角から守護所を意識的に研究することはこれまでなされていない。

守護所・城下町については、戦国大名や織豊政権による規定性が重視され、単線的な発展段階論が提起されたこともあった。しかし実際には、守護所から城下町への展開のあり方、戦国期城下町の空間構造の偏差は大きい。これは大名権力の性格、地域社会の個性によると考えられる。また、周辺の港町や宗教都市など、先行する都市群のあり方がどのようなかたちで城下町に影響

を与えているかに留意する必要もある。その上で、織豊期城下町における普遍性、全国一律のマニュアル化などについて検討する。

16世紀には、東アジア海域世界における交流の活発化が日本列島にも影響をおよぼした。これは権力構造の改変にも結びつき、分裂から「天下統一」へ社会の動向を切り換えた一つの要因になったと考えられている。統一政権やその配下の大名が都市への集中政策を展開し、武士や商人・職人の城下町集住を進めるとともに、在地市場の停廃と城下町への集中もなされた。この過程で、戦国期城下町が、マニュアル化された豊臣期城下町に改変されてゆくと考えられている。しかし、そもそも豊臣期(1582年～17世紀初頭)の城下町の事例を網羅的に収集し、分析した研究はない。どこに、どのような城下町が存在したのか、その地域で活動している研究者以外、知らないのが実情である。豊臣期城下町の空間構造や地域社会における機能を丁寧に分析すると、個性や偏差の強さに気づく。本研究では、一見、斉一化されたようにみえる豊臣期から近世初期にかけての城下町それぞれの特質を追究することで、近世城下町についての新たな分析視角を提示する。

近年、城郭や城下町などが「まち」のシンボルとして地域活性化の役割をになう機会が増えている。きっかけは発掘調査や古絵図の発見、町並み保存など多様であるが、学術的に正しい情報と評価にもとづいて城や城下町が市民の関心をよび、歴史をいかした町づくりや文化財保護に結びつくことは好ましい。本研究においても、地域で活動する研究者と連携し、研究集會を市民に開放して開催することとおし、最新の研究成果の国民・市民への普及につとめることとする。

### 3. 研究の方法

本研究では、全国の守護所・城下町の事例を網羅的に析出し、その地域的分布(どこに、どんな城下町があるか)の悉皆調査を行う。発掘調査成果、城郭縄張り、都市法令などを通して、城下町の空間構造・社会構造を比較し、地域的特色、時代による変遷を解明する。各地での研究集會の開催によって、研究メンバー(研究代表者・研究分担者・研究協力者)の共通認識を養うとともに、最先端の研究を紹介する場とする。

研究集會( )については、多くは調査研究が進んでいる城下町であり、研究成果を報告いただき新しい位置づけを試みた。周辺の他の城下町や港町・宗教都市などについての報告、権力編成や経済流通についての分析などを組み合わせた。地元の研究協力者と相談しながら市町村教育委員会の協力を得、可能な限り市民に開放する形態とした。2022年度には、大阪で総括シンポジウムを催して、全体的な成果を確認するとともに、研究成果の出版への道筋をつけた。

### 4. 研究成果

#### 中世の武家拠点と中世都市

中世の武家の拠点は居館・城館であるが、それらには顕著な交易の場は付属していなかった。武家の主従制と、中世民衆(とりわけ遍歴する商人ら)の「無縁」の気質を、本来的に相容れないものと断じた網野善彦氏の説には必ずしも賛成しないが、実態として15世紀まで、地方社会においては、武家と都市の結びつきはそれほどではなかった。

中世都市は、首都京都をのぞけば、巨大なものは港町であり、それ以外には宗教都市や交通集落がみられる。市庭(いちば)も各地に成立していた。但し、港町には多くの寺社が立地し、そうした寺社の境内・門前の集積が都市空間になっている。宿や市庭でも、寺社の門前で開かれたものが多い。

中世都市は一般に、武家の支配がまったくおよばなかったわけではないが、少なくとも武家が都市を造ったり、都市の中心的な支配者となることはほとんどなかった。

#### 室町時代の守護所とその変容

室町時代、各国の守護が管国支配のために設定した守護所は、その実態は千差万別であった。ただ、応仁・文明の乱が激しくなる1470年代くらいまでは、西日本では、中国・四国以東の守護は在京が基本で、管国には守護代などを派遣するだけであった。そのため、守護所が後代の城下町のような人口集中、都市機能をはたすことはなかった。守護所の多くは、古代の国府の系譜をひく府中に設けられた。独立の守護館を築かず、寺院に間借りするパターンも多く見られる。

この段階で、どうして守護は在京でありながら管国を支配できたのであろうか。一つは、室町幕府の体制がしっかりしていて、その支配システムや威令が地方社会に十分およんでいたからである。もう一つは、支配のあり方が戦国時代以降とちがっていたからだろう。まだ荘園制という枠組みが生きていて、守護は荘園制を前提にすることで、管国の秩序を維持し、守護役の徴収なども可能だったのだろう。

ただ、15世紀になると、守護所が移動する事例も見られる。若狭や美濃などで明確であるが、一国の経済・流通の拠点到守護所がすり寄ってゆくのである。

応仁・文明の乱を経るなかで、幕府の体制が揺らぐとともに、地域社会が変容をとげてゆく。一般に、村落共同体の強化、村町制の成立などと表現される社会変動を念頭においているが、これによって各国における秩序が乱れ、守護が京都から下向しないことには管国の「政治」ができなくなったのだろう。

この事態をうけて守護所、すなわち武家拠点のあり方が大きな変化を遂げる。京都から下向してきた守護やその一族・家臣たちが拠点とその周囲に恒常的な居住空間を形成するようになったのである。さらに、守護が常住して政治をはじめると、それまでと異なり、国内の有力武士の多くも守護所に入入りしはじめる。本拠は在地にあっても、必要に応じて守護所への出仕が必要となったであろう。さらに、国内の寺社をはじめ、守護に陳情したり、守護法廷での裁判を求め

る人々が守護所にやってくるようになる。

こうして「政治」の場として守護所に人があつまりようになれば、そうした人々をめぐって、商人や宗教者があつまり、物流がうまれる。つまり守護所の都市化が進行すると考えられる。こうした状況は、多くの国では16世紀の前半に生じたと考えられ、16世紀第2四半期には加速する。

#### 戦国時代の社会変動

戦国時代中盤（16世紀第2四半期）には、幕府の全国統治はいっそう弱体化し、大名は「守護」としての性格よりも、独立性をつよめた「戦国大名」「戦国期地域権力」としての性格を強化する。また旧来の守護家が下克上によって力を失ったり、大名が他国に侵入して領国拡大するようなことはじまる。こうして戦国争乱が拡大するのだが、これによって農村の疲弊や都市の荒廃が進むとみることが誤りであろう。

この時代は、石見国産の銀を求めることをひとつのきっかけとして中国（明国）や南蛮（ポルトガルなど）の人々や文物が流れ込み、それと引き替えに日本の産品も輸出入を増大した。東アジア海域世界のなかで人や物の動きは、西国から畿内を中心に大規模な経済・流通の発展に寄与した。これとも連動して、農村の豊かさ、安定性が増し、人口が増え、政治的力量（自治・自律）も全体的には向上していったと考えられている。筆者は、戦国「争乱」の社会的ダメージは限定的であり、戦国時代はむしろ高度経済成長の出発点であったと考える立場である。

都市は未曾有の発達を遂げた。京都は、一部の研究者が主張するような衰頹期ではなく、応仁・文明の乱からの復興を遂げ、よりいっそう発展した。その京都への全国からの物流は増加したので、それを受けとめる摂津・和泉国堺、若狭国小浜、越前国敦賀、伊勢国津などの港町も発展した。さらにこれらと結びつく全国の港町の隆盛が確認される。陸上でも、浄土真宗の寺内町など、新たな形態の都市が勃興し、また従来からの宿や市庭の市町化、在郷町化が進展するなどした。ただ、農村部では、散在的であった市庭が集約され、より少数の町場が大規模化する動向がはじまったのではないかと想定している。

#### 戦国（期）城下町の成立と卓越化

こうした社会全体の動向に連動して、守護所から戦国城下町への武家拠点の変化も認められる。守護所は文字通り、守護館を中心とする町場であるが、戦国時代（中盤）になると大名の拠点だけでなく、その一族・家臣の有力者も町場を形成するようになるので、戦国城下町とよぶほうが適当であろう。また織豊期城下町、近世城下町と区別するため、戦国期城下町とよぶこともみられる。港町や宗教都市・在郷町とならび、各国で城下町の都市発展が進んだ。大名や有力武士の城下町が、他種の都市と同様に都市ネットワークを形成するようになったといえよう。但し、都市の規模や中心性においては、港町など中世都市のほうが卓越していたであろう。

16世紀中葉から第3四半期になると、九州の大友氏・島津氏、龍造寺氏、中国地方の毛利氏・尼子氏、四国の長宗我部氏、畿内の三好氏、北陸の朝倉氏や上杉氏、中部地方の武田氏・今川氏、関東の後北条氏といった著名な戦国大名が、他国の領国化をいっそう進め、巨大な戦国大名となってゆく。これにともない大名城下町の都市拡大が顕著となる事例がふえる。なかでも豊後国大友氏の府内（大分市）、越前国朝倉氏の一乗谷（福井市）、越後国上杉氏の府内（直江津。上越市）、駿河国今川氏の駿府（静岡市）、相模国後北条氏の小田原などは、かなりの都市発展があったことが研究によっても確認されている。

その一方で、安芸国毛利氏の吉田郡山（安芸高田市）、出雲国尼子氏の富田（安来市）、土佐国長宗我部氏の岡豊（南国市）、甲斐国武田氏の甲府などは、一定の家臣団集住は確認できるものの、町場（交易空間）の形成については必ずしも十分には確かめられていない。三好氏については、摂津国芥川城（高槻市）、河内国飯盛城（大東市・四條畷市）では山城（やまじろ）の規模に比例する町場形成は確かめられず、また阿波国勝瑞でも町場形成はそれほどでもなかったようである。こうした大名領国では、たとえば安芸国厳島（廿日市市）、出雲国杵築（出雲市）、摂津・和泉国堺など、先行する中世港町がもつ強大な中心地性をいまだ克服できず、それに頼る流通支配が主であったといえるかもしれない。各国の事情はそれぞれである。

またこの段階になると、大名権力が都市の商人らを統制し、従来からある都市や流通を掌握する動向を強めることもみられる。史料的に具体的に確認できるのは、毛利氏 厳島、尼子氏 杵築、朝倉氏 北之庄などであるが、都市法令を各地の戦国期権力が積極的に発出するようになることもみられる。いわゆる禁制が多く、まずは従来の特権の安堵からはじまるが、それまで地域社会の慣行のなかで認められていた交易上の権利を、大名が保障することがはじまるのである。畿内の三好氏でいえば、河内国の寺内町などに対する禁制を発給するようになる。

こうして戦国大名領国内で、大名の城下町の卓越性が高まり、政治性だけでなく、流通構造、人口、生産拠点などとしても中心地として地位を向上させてゆくとみられる。大名による一族・家臣団への支配力の浸透、大名権力における官僚制の進化は、家臣たちの大名城下町への集住圧力となったであろう。御用商人や一部運輸業者への特権付与は、大名の都市・流通支配を進めた。大名は、都市の共同組織を支配の単位と認め、また村落共同体に一定の自治を承認した上で自律を強制するようになってゆく。村落間相論が、大名法廷で裁かれる機会も増えてゆく。多くの大名は、こうした自らの地位を象徴する意味でも山城の上に政治・生活の場を移転してゆくのである。

なお、このような観点からみた場合、織田信長の美濃国岐阜、近江国安土（近江八幡市）を、同時期の他の戦国大名城下町より優れていたと評価することは難しい。岐阜は美濃国内では中

心地性を獲得していたが、濃尾平野レベルで観察すると、伊勢国桑名、尾張国熱田（名古屋市）などの港町におよばない。安土築城以降、最終段階の信長領国でみても、京都や堺の中心地性は絶対であり、信長が最後まで畿内に独自の武家拠点を設けられなかったのもそうした「力関係」の作用によるものであったのではないか。

豊臣政権の「首都」城下町と豊臣大名城下町

16世紀の最終段階、これを打ち破ってゆくのが羽柴（豊臣）秀吉である。秀吉はまず大坂に拠点をすえた。生前の信長の方針を踏襲したものとみられるが、本願寺・一向衆の本拠に巨大な城郭を築き（これが「石山」と呼ばれたらしい）渡辺津、天満社門前、四天王寺門前などの複数の中世都市を統合することから城下町づくりをはじめた。ついで、上町地区に広大な家臣団や諸国の大名の居住区を設けたり、船場地区・天満地区に巨大な町場を設けたりした。町場は大坂湾と直結し、城下町であり、かつトップクラスの港町でもあった。これまで兵庫（神戸市）、尼崎、堺などが分有していた瀬戸内航路東端の機能を集約してゆくことになる。堺の都市としての衰退は、時代としてはもう少し先であるが、その先鞭がつけられたことはまちがいない。

摂津・河内・和泉などの中心都市としての大坂の卓越性も高まってゆく。豊臣時代、兵庫、摂津国茨木・高槻、河内国八尾、和泉国岸和田などの城郭・城下町も発達した。河内国富田林、和泉国貝塚などの寺内町や摂津国平野などが人口を増やし、都市領域を拡大したこともまちがいない。ただ、それらを凌駕して大坂城下町が発展したのである。

秀吉は、京都の中心部にも乗りこんでゆき、聚楽第を築き、そのまわりに固有の城下町を設けた。上京・下京をふくめ、御土居（おどい）で圍繞することで、京都全体をある種の城下町化した。さらに、京都の南郊に伏見城・城下町（京都市）を築き、京都と大坂を結んだ。たしかな史料はないが、この時代、山城国では、大山崎、八幡・淀、宇治など、京都へつながる主要交通路上の都市（在郷町・城下町）も発達したと推定される。近江国では、京都の東の玄関口にあたる大津が新たに興隆した。

ところで、大坂、京都（聚楽第）、伏見には、時代による変遷があるとはいえ、全国の大名屋敷が設けられた。大名の妻子（正妻や嫡子）が住まわされたことから明らかなように、ここが各大名の「本拠」とされた。江戸時代の江戸にくらべて、より徹底した中央集権が実現したともいえる。

こうした秀吉の大坂、京都・伏見の「首都」形成の方法、摂津・河内・和泉国や山城国における城下町による領国支配の方法が、豊臣政権下の諸国に輸出された。「豊臣大名マニュアル」という議論がしばしばなされる。つまり、一人前の豊臣大名（豊臣政権を構成する大名）たらんとすれば、これだけの要素をはたさなければならない。そういうマニュアルがあったとみる見方である。兵農分離、太閤検地はもとより、石垣の積み方、娯楽としての茶の多用など、さまざまな分野で「全国統一」がなされたと考えられている。

そういうマニュアルの一項目に、「城下町の造り方。活用方法」があったのではないかと考えられる。それは、大坂の模倣であり、大坂・伏見のミニチュア版であった。すなわち、それぞれの大名領国において武家拠点の卓越性を多様な側面から高める政策の実行がもたらされたのである。

武家階級の統一という面では、まず兵農分離の徹底がはかられ、武士（侍）身分の確定が求められた。そして武士は城下町に本拠を移すことが義務とされた。もちろんこれは大身の家臣で、従来は別の城、自ら経営する城下町をもっている場合でも同じである。大名によっては、それまでは権力基盤が脆弱であったためこのような強権をふるうことが難しい者もあっただろうが、こうした政策を豊臣政権がバックアップし、大名権力の権力編成を保障したのである。

都市支配という面では、大名城下町が領国内での卓越性をいっそう高めたものと推測される。これについては必ずしも明確に示す事例が多いわけではないが、戦国時代には存在した城下町や在郷町・港町などで、16世紀末から17世紀にかけてその都市的機能がうしなわれ、農村や漁村に変化してゆく例から想定されるだろう。また豊臣政権期に移転する拠点も多い。毛利氏が吉田郡山から広島に移転した事例がもっとも典型であろうが、城下町にして港町であることが重要な要素となったのである。これは、領国内の水運を束ねることが目標であったからであろう。

こうして大名の城郭（これも山城から平山城・平城に変化してゆくが）を中心とする城下町が領国編成の中心にすえられ、政治的にも経済的にも卓越した中核とされてゆく。もちろん、豊臣政権初期にすべてが実現するわけではなく、当初は複数の拠点城郭・城下町が分立する場合も多い。しかし、それが17世紀に入り、徳川幕府の時代になるにしたがい、一極集中をつよめてゆくのである。

こうして豊臣時代の後半以降、私たちが一般的にみるような近世城下町のあり方が実現してゆくと考えられる。

以上、中世から近世初期にかけての武家拠点成立（確立）の過程を追ってきた。中世末期から近世初期への巨大な社会変動、すなわち戦国の「争乱」から統一政権の確立という動向が、武家の拠点もふくむ都市論によって解明できることを論じた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計22件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 谷 徹也	4. 巻 令和2年度
2. 論文標題 豊臣政権の拠点城郭と「首都」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都府域の文化資源に関する共同研究会報告書	6. 最初と最後の頁 22-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村井良介	4. 巻 24
2. 論文標題 大阪市立大学所蔵の榑崎家文書の写について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 市大日本史	6. 最初と最後の頁 107-134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 仁木 宏	4. 巻 282
2. 論文標題 戦国時代の富田林 - 寺内町研究の展開と課題 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ヒストリア	6. 最初と最後の頁 7-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 仁木 宏	4. 巻
2. 論文標題 都市史における岐阜城・城下町	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 史跡岐阜城跡 総合調査報告書	6. 最初と最後の頁 193-214
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 仁木 宏	4. 巻 852
2. 論文標題 戦国時代都市史研究入門	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 40-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 仁木 宏	4. 巻 古代・中世編
2. 論文標題 戦国大名と地域社会	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本歴史	6. 最初と最後の頁 313-334/313-334
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 仁木 宏	4. 巻 25
2. 論文標題 勝龍寺城の「築城」と廃城	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 乙訓文化遺産	6. 最初と最後の頁 19-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 仁木 宏	4. 巻 なし
2. 論文標題 戦国城下町一乗谷の再評価 - 城下町研究、戦国大名研究の新展開をうけて -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中世・近世における石のまちづくり 調査研究報告書	6. 最初と最後の頁 433-440
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 仁木 宏	4. 巻 73
2. 論文標題 戦国時代駿河国大石寺の研究 - 「無縁所」と「門前」を中心に -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 人文研究	6. 最初と最後の頁 96-112
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋修	4. 巻 413
2. 論文標題 内海世界の将門と貞盛	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 地方史研究	6. 最初と最後の頁 4-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋修	4. 巻 1
2. 論文標題 笠間時朝と小田一族	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 八田知家と名門常陸小田一族	6. 最初と最後の頁 88-94
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 天野忠幸	4. 巻 155
2. 論文標題 戦国時代の日本国王と海外貿易	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ヒブリア	6. 最初と最後の頁 53~75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 谷口正樹	4. 巻 23
2. 論文標題 観音寺と観音寺村に関する覚書	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 市大日本史	6. 最初と最後の頁 117-121
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山田邦和	4. 巻 759
2. 論文標題 京都府の考古学史	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 月刊考古学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 26-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 谷 徹也	4. 巻 1
2. 論文標題 大徳寺黄梅院にみる近世京菩提寺の成立と存立	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中近世武家菩提寺の研究	6. 最初と最後の頁 261 ~ 287
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 天野忠幸	4. 巻 1
2. 論文標題 飯盛城主と下克上	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 飯盛城跡総合調査報告書	6. 最初と最後の頁 226 ~ 236
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 仁木 宏	4. 巻 1
2. 論文標題 飯盛城の歴史的位置 - 「天下」の首都 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 飯盛城跡総合調査報告書	6. 最初と最後の頁 237 ~ 242
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 天野忠幸	4. 巻 1
2. 論文標題 奈良県の城館と中世社会	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 奈良県中近世城館跡調査報告書	6. 最初と最後の頁 14 ~ 21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋 修	4. 巻 3
2. 論文標題 「佐竹家人」岩瀬与一太郎考 その出自と本領をめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 常陸大宮市史研究	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋 修	4. 巻 1
2. 論文標題 笠間時朝論序説 常陸国における宇都宮一族の所領形成	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 宇都宮一族	6. 最初と最後の頁 29-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋 修	4. 巻 1
2. 論文標題 湯浅党の歴史	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 湯浅党城館跡総合調査報告書	6. 最初と最後の頁 17-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田邦和	4. 巻 836
2. 論文標題 中世天皇制と都市京都 中世における大内裏と内裏	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 59-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 仁木 宏
2. 発表標題 「楽市令」の再検討
3. 学会等名 読史会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 仁木 宏
2. 発表標題 中世後期、越前と周辺地域の拠点をどうとらえるか
3. 学会等名 武家拠点科研・福井研究集会「越前における武家拠点の形成と変容～16-17世紀を中心に～」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山田 徹
2. 発表標題 室町期荘園制と「守護所」
3. 学会等名 武家拠点科研・福井研究集会「越前における武家拠点の形成と変容～16-17世紀を中心に～」(招待講演)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計12件

1. 著者名 尾下 成敏、馬部 隆弘、谷 徹也	4. 発行年 2021年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 288
3. 書名 戦国乱世の都	

1. 著者名 京都学研究会(谷徹也ほか)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 182
3. 書名 京都を学ぶ【伏見編】	

1. 著者名 仁木宏、鈴木正貴	4. 発行年 2021年
2. 出版社 高志書院	5. 総ページ数 330
3. 書名 天下人信長の基礎構造	

1. 著者名 仁木 宏、磐下徹	4. 発行年 2021年
2. 出版社 文理閣	5. 総ページ数 231
3. 書名 歴史家の案内する大阪	

1. 著者名 仁木 宏	4. 発行年 2021年
2. 出版社 戎光祥出版	5. 総ページ数 319
3. 書名 戦国織豊期の地域社会と城下町東国編	

1. 著者名 仁木 宏	4. 発行年 2021年
2. 出版社 戎光祥出版	5. 総ページ数 275
3. 書名 戦国織豊期の地域社会と城下町西国編	

1. 著者名 高橋 修	4. 発行年 2022年
2. 出版社 高志書院	5. 総ページ数 240
3. 書名 戦う茂木一族	

1. 著者名 天野 忠幸	4. 発行年 2020年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 296
3. 書名 室町幕府分裂と畿内近国の胎動	

1. 著者名 天野 忠幸	4. 発行年 2021年
2. 出版社 中央公論新社	5. 総ページ数 240
3. 書名 三好一族 戦国最初の「天下人」	

1. 著者名 相馬市史編さん委員会（七海雅人）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 相馬市	5. 総ページ数 535
3. 書名 相馬市史 第4巻 資料編 中世	

1. 著者名 高橋 修	4. 発行年 2019年
2. 出版社 戎光祥出版	5. 総ページ数 363
3. 書名 シリーズ・中世関東武士の研究 熊谷直実	

1. 著者名 矢田俊文・高橋一樹・小谷利明・田中慶治・森田真一・村井良介ほか7名	4. 発行年 2019年
2. 出版社 高志書院	5. 総ページ数 360
3. 書名 戦国期文書論	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	七海 雅人  (NANAMI MASATO)  (00405888)	東北学院大学・文学部・教授   (31302)	
研究分担者	谷 徹也  (TANI TETSUYA)  (10781940)	立命館大学・文学部・准教授   (34315)	
研究分担者	谷口 正樹  (TANIGUCHI MASAKI)  (20881311)	地方独立行政法人大阪市博物館機構（大阪市立美術館、大阪市立自然史博物館、大阪市立東洋陶磁美術館、大阪・大阪歴史博物館・学芸員	
研究分担者	山田 邦和  (YAMADA KUNIKAZU)  (30183685)	同志社女子大学・現代社会学部・教授   (34311)	
研究分担者	村井 良介  (MURAI RYOSUKE)  (30419684)	岡山大学・教育学域・教授   (15301)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	高橋 修 (TAKAHASHI OSAMU) (40334007)	茨城大学・人文社会科学部・教授  (12101)	
研究分担者	山田 徹 (YAMADA TORU) (50612024)	同志社大学・文学部・准教授  (34310)	
研究分担者	天野 忠幸 (AMANO TADAYUKI) (50711115)	天理大学・文学部・教授  (34602)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関